「ケイちゃん、ケイちゃん、ずやくってよいでね。」

男の子は、人の目をおしいほどの高へ伝っていく。

紀子の方へ出ようとして、その高に、小さい足をかけて、

「駄目、駄目、おとしくしてるんだよ。」

その足を中へおろして、高を一歩下りた。

靴が高のふちにぶつかる

靴音をたてた。

「握手、ね。」

と、子どもの手を握った。

父親は

べいがぶんぶん流れ出した。

子供が動きだした。

「さようなら。」

子の言葉には握手をかえさない。又紀の流れを離れてのぞく母がえ、すぐ流れえなくなると、子どもはちゃんと承知して、

計画の話のそばに茶の机をのべた。紀子はでしゃばらず、

と話の方が不安になった。紀子はお茶のびんを抱えて、

「紀子」

と言ってきた。しゃ話やに同

同の人に注意をひかれる。